

颶風と颶風

台風は旧漢字では颶風と書く。秋の季節の激しい嵐を日本では「野分(のわき)」と呼び、枕草子や源氏物語にも詳しい描写で登場している。この時代は京都に襲来した台風が多かつたとの統計もあり実体験として書かれたのだろうといわれている。野分の言葉は感性に触れるような響きをもち、大(おお)風はそのものを表わしている。ところが颶風という漢字はもともと日本にも中国の漢字になかった。今日の台風にあたるのは古来から一貫して颶風(ぐふう)が使われており、ファン現象を風炎とあてたように、颶風は和製漢字で、明治時代の終わりから使われ初めてまだ百年に満たない。

颶風の話に戻そう。ここに『颶風新話』といふ越前大野藩、伊藤慎という藩士のよつて訳された一冊の本がある。江戸末期の安政四年(1857)年、インドのカルカッタ在住の英人ピッチングトンの書いた「ゲス・プレッケン、ヲフル、ヲルカ・ネン」が和蘭語訳され、その4年後に日本語に翻訳されたもので、台風論と航海術が書かれている。この本は船頭頭や若い手を登場させて、ちょうど長屋の隠居と店子のような軽妙な会話のなかで、当時として最高水準の話をわかりやすく説明している。一八一ページにわたる大作である。

西インド諸島の「アルカ・ン」(ハリケーン)から新学問としての「ジクロギ」と呼びはじめた。恐らくまいまいのかぜ学問)におよび、ベンガル湾の颶風を「ジクロネ」と呼びはじめた。恐らく

インド洋やベンガル湾で熱帯低気圧をサイクロンという呼び名となつたのもこの頃からではなかろうか。

「ストルム」を暴風にあて、「アルカ・ン」の違いは強さで決まり、回帰線との間を「アルカーン」、外ではストームと分けている。現在でも最大風速が毎秒七・二メートル、三四ノット以上となつたものを颶風としているが、タイphoonはハリケーンと同じで六四ノット以上の強さをもちストームと分けられている。ベンガル湾に抜けられればハリケーンなる。

「バロメーテル」(気圧計)を用いると、中心に向かって急激に気圧が下がることが発見され、さらにその中心には、実に静寂などころが「一方所あって、時には太陽が顔をだす。」「アルカ・ン」が烈しければ烈しいほど中心は静かであると語られており、台風眼の存在とその性質まで正確に記述されている。航海術の本でもあるので、風に背を向けて立つて、北半球では左の手、南半球では右の手を差し出せば、その先が中心」とボイス・バロットの法則も理解されている。台風からの避航術も詳しく、進路の見極めから、その西側を追い風に乗つて遠ざかりながら逃げる

方法である。一五〇年前の本とは思えない斬新さと理解し易さあり、現在読んでも参考となる。

颶風は四方から風が集まる暴風と定義され、発達した温帯低気圧の〇風と明確に区別されている。南シナ海の暴風は「タイphoon」と呼ばれているが、福建省から台湾付近で呼ばれていた大風(たいふう)からきているものか、アラビア語の「トグルを巻く」というタッフーンという風の言葉が起源なのか明らかではない。ハリケーンはカリブ海の西インド諸島の現地語で、風の神、魔物といわれているララカンまたはウラカンからきていると言われており、フィリピンでのバギオのように地方独自の言葉が一般化してきたものだろうか。

「颶」の字の登場は、日本では曲亭馬琴の「椿説弓張月」(一八〇八年)のなかで、「それ大風烈しきを颶(はやて)、甚だしきを颶(あかしま)と称:」とでてくるが、この時代は、はやては颶風をあてていた。台湾の対岸の福建省あたりでは、颶風の前兆を「颶母(ぐぼ)」といい、風をはらんで「颶颶(ふうたい)」といった。大風という言葉があり、両者を結びつける十分な素地がある。

そこで「颶風」を当時の中央気象台(現在の気象庁の前身)の岡田武松台長が使い広げたといわれている。岡田台長は千葉県手賀沼のほとり布佐で生まれ、馬琴の「南總里見八犬伝」を暗誦するほどだったと伝えられており、弓張月も恐

らく熟読していたのではなかろうか。氏が傾倒していた台風論の草分けであった北尾次郎教授の論文「大気渦動及び颶風理論」、また明治年刊の水路部の『極東颶風論』においてもみな颶風である。このなかには東シナ海で「1902年、汽船 DE WITTE ノ出會セシ大風」、九「七hPa以下」の猛烈な大風が見事に解析されていた。これらを十分知り尽くした上で、南シナ海で「タイフーン」と呼ばれていたものを国際的なものとして、同義語としての大風を考慮しつつ颶風を引用して当てたのであろう。使ってみれば共通性もあり先見性のある言葉で以後颶風が一般化した。英断だったのではないかろうか。